

フランスの挿し絵入り新聞 『イリュストラシオン』のコレクションについて

木下 賢一*

フランスで最初の挿絵入り週刊新聞『イリュストラシオン』(*L'Illustration, journal universel*)のコレクションが、本学の2005年度図書館特別資料として購入され所蔵されている。

この豊富な挿し絵入りの新聞は、1843年3月4日に第1号が発刊され、1944年8月19日の5292-5293合併号で廃刊となるまで102年にわたって発行された。総ページ数は、本文のみで10万ページ以上、広告も含むと17万ページに達する。また、この新聞の独自性と価値の核心をなす図版(版画と地図や写真など)は25万点以上掲載されている。1843年当時一般に新聞は4ページであったが、『イリュストラシオン』は16ページからなり多くの版画が掲載されていた。紙面は大判で28×32センチある。

発行部数は発売以来1万数千部を前後していたが、19世紀末から増加しはじめ、20世紀初頭には5万部に達し、1920年代には20万部を越えた。最大発行部数は、1929年のフォッシュ Foch 元帥の死去の際の65万部である。また、世界中に配布されており、1931年時点でみると148カ国で予約購読されていた。

初期の年間購読料は30フランであり、ばら売りで一部75サンチームであった。19世紀においては、購読料からいっても、読者は民衆層とは無

*きのした・けんいち/明治大学文学部教授/西洋史学

関係であった。『イリュストラシオン』の読者は、ブルジョワではあるが、そのなかでも穏健な意見をもち、中庸を重んじ、共和主義的価値観に一体化した知識人や支配階級の一部であったといえる。しかし、20世紀にはいと、発行部数も急増し読者層も大衆化していった。図版も版画から写真が中心になり、この新聞のもっていた性格も変化していった。

この新聞が発行されていた時期は、国内においては産業化と都市化が進み人びとの生活が大きく変容し、他方ではアジアやアフリカの植民地化が推進され、やがて第一次世界大戦と第二次世界大戦に至る時期であり、この新聞はまさにフランスの近現代史の歩みとともに進んできたといえよう。ここでは創刊から20世紀はじめまでの『イリュストラシオン』についての歴史を概観し、この膨大な資料の価値について述べてみたい(1)。

『イリュストラシオン』の創刊に立ち会ったのは、ジョアン (Adolphe Joanne), シャルトン (Edouard Charton), デュボシェ (Jean-Jacques-Julien Dubocher), ポラン (Jean-Baptiste Alexandre Paulin) の4人であった。4人に共通するのは自由主義的な共和主義者であることであり、とくにジョアンとデュボシェおよびポランは、1830年にチエール (Adolphe Thiers) やキャレル (Armand Carrel) が中心となって創刊した左派の日刊紙『ナショナル』*National* に参加している。

4人の創刊者たちは、その野心を次のように述べている。『イリュストラシオン』は、原則に基づいてわれわれがまさに望んでいたものになるだろう。すなわち、現代の歴史がその年代記に記す事実のすべてがその時点において語られ、描かれる巨大な年鑑となるだろう。それらの事実とは、政治的事件、公的儀式、国民的な大祭典、大災害、町の騒ぎ、著名な人物の死、同時代人の伝記、演劇の上演、有益な発見、美術と産業の展示会、新刊書、軍隊の栄光の事績、モード、製品のモデル、民衆の生活情景などである。『イリュストラシオン』は、一言でいえば、19世紀の生活と社会が、そのすばらしい活動と非常に多様な動きのなかで、映し出される忠実な鏡となるであろう。」また、第1号の巻頭に掲載された、「われわれの目的」という宣言においても、「政治、戦争、産業、風俗、演劇、美術、衣服と家具のモードに関するすべてのニュースがわれわれの対象となる」と述べているように、この新聞は政治を扱うとしても政治党派の機関紙では

なく、19世紀フランスの生活と社会のあらゆる面を正確に捉えることを目指そうとした。その手段として、図版を中心にすえたのであった。

ジョアンは、多くの著作を残している地理学者であったが、ガイドブックによっても知られている。シャルトン、初期のサン・シモン主義者で、1833年にはフランスで最初の挿し絵入り雑誌『マガザン・ピトレスク』(*Magasin pittoresque*)を発刊している。1848年には立憲議会に選出されるが、ナポレオンのクーデタに反対し政治から引退した。デュボシェも1848年以後政治から離れ、実業の世界に入っていった。

1850年には、それまでの4人の共同経営からポランが社主兼編集長となり、1959年の死まで『イリュストラシオン』紙の中心となった。彼はフランスにおいてはじめて、特派員を現地(しばしば外国)に派遣するルポルタージュの手法を採用した。ポランは、『ナショナル』紙の自由主義的共和主義に深く共感しており、その政治的立場は終生揺らぐことはなかった。また、ポランは秩序の人であり、自由の主要な条件であるとする平和と秩序を強化するものはなんでも支持した。七月王政にも第二帝政にも反対であったが、明確な立場を主張するということではなく、政治に直接関わることは避けた。この政治的スタンスは、その後の『イリュストラシオン』のリーダーに引き継がれることになった。

ポランが1859年に亡くなり、1860年にその跡を継いだのが挿し絵画家であったマルク(Auguste Marc)であった。この時から出資者の構成に変化があり、創刊時にはその多くがジャーナリストと法曹からなっていたのとは対照的に芸術家が支配的になった。これは『イリュストラシオン』が、今後政治的な事象よりも美的なものを重視することを意味した。1884年には最初のカラー図版が登場し、同年最初の写真が掲載されるが、質が悪く木版画に太刀打ちできるようなものではなく、翌年には放棄している。写真が版面にとって変わるのはずっと先になる。

1886年にオギュスト・マルクが亡くなり、その息子のリュシアン・マルク(Lucien Marc)が跡を継いだ。リュシアンは、ポランや父のマルクとは異なり新聞広告に積極的であった。1897年の『イリュストラシオン』の収支は、広告収入によってのみ黒字となっており、もはや広告無しには経営が困難になっていた。もともと挿し絵を説明するためにテキストがあっ

たのに対し、1900年ころから、挿し絵はそれまでとは逆に、テキストの主張を支持するものとなっていく。絵が中心から補助手段へと変化していった。

リュシアン・マルクの後、1904年からバシェ (René Baschet) が廃刊までの40年間を率いた。『イリュストラシオン』は、ますます部数を大幅に増加し、広告収入に依存するようになり、大衆化が進展する。こうして19世紀における挿し絵入り新聞の斬新さと創刊者たちの目指した目標は、性格を変えていった。

マルシャンディオは、『イリュストラシオン』に一貫していることとして、次のような点を指摘している(2)。

- 共和主義原理を擁護し、穏健な共和国の政府と指導者に対して絶対的支持を与える。
- 特に政治屋的な政治と政治で食っている政治屋に対する嫌悪を示す。
- 過激ではない愛国主義の神聖な価値を擁護する。
- 軍隊への賛美にもかかわらず、戦争を煽ることには反対する。
- うわさ話や激高、スキャンダル、猥雑さを嫌う。
- 外交政策に関しては、親露で反英また反プロイセンの立場をとる。
- 資本と労働の統一を主張し、所有権を擁護する。

これらにさらに加えるならば、「文明化の使命」とそれに基づいた植民地支配の正当化と支持をあげることができよう。すなわち、フランス国内における民主化の推進と、アジア、アフリカにおける植民地支配が、共和主義原理と両立するとみなしている。そういう意味で、『イリュストラシオン』は、政治的には第三共和政の支配階級—その自由主義的な部分—のイデオロギーを体現していたといえるだろう。

われわれは、『イリュストラシオン』という類まれな「19世紀の生活と社会が・・・映し出される忠実な鏡」によって、19世紀のフランス社会と世界のイメージを(それは上にみたような視角からのイメージでもあるが)生き生きと捉えることができる。図像は描くものの視点を超えてさまざまなことを開示する。

『イリュストラシオン』は、政治新聞ではあるが、その価値はその図版にあった。挿し絵画家としては、ヴァランタン (Henri Valentin), ルナール (Edouard Renard), ガヴァルニ (Gavarni), ブランシャール (Pharamond Blanchard), マルク (Auguste Marc), ベルタル (Bertall), シャン (Cham) などが活躍した。なかでもガヴァルニとシャンは、ドーミエ (Daumier) とともに、19世紀を代表する3人の風刺画家として知られている。

小倉孝誠氏が、すでにこの資料の豊富な挿し絵を存分に駆使して、19世紀フランスの社会についての興味深い三部作をものさされている(3)。この膨大な情報量をもつ資料をどのように利用するか、すなわちこれらの資料からどのような意味を引き出せるかは、読む側の問題となるだろう。

この新聞が権威をもっていたのは、文学、演劇、美術、モードといった文化欄であり、政治史や社会史だけでなく、このような分野でも価値ある資料であるといえよう。例えば、文学ではサンド (George Sand), ロチ (Pierre Loti), クローデル (Paul Claudel) などの名がみられる。

なお、本学の図書館は、最初の挿し絵入り新聞であるイギリスの *Illustrated London News* (London, 1842~1991) のマイクロフィルム版とドイツの *Illustrierte Zeitung* (Leipzig, 1843~1944) のオリジナル版をすでに所蔵しており、ほぼ同時期の英仏独の挿し絵入り新聞が閲覧可能となっている。

【註】

(1) 小論作成にあたって参考にしたのは次の文献である。

L'Illustration, journal universel, 1843-1944.(本学所蔵コレクションには、1843-1932年の間に新聞に登場した人名と地名の索引からなる別巻が収められている：*L'Illustration, Index des noms de personnes, index des noms géographiques, 1843-1932*, 1934, 287p.)

L'Illustration, Histoire d'un siècle 1843-1944, 16 vols., Le Livre de Paris, 1984.

Marchandiau, Jean-moël, *L'Illustration, 1843-1944. Vie et mort d'un journal*, Bibliothèque historique Privat, Toulouse, 1987.

Histoire générale de la presse française, Tome II, Presses Universitaires de France, Paris, 1869.

(2) Marchandiau, *op.cit.*, p.297.

(3) 小倉孝誠『19世紀フランス—夢と創造—』人文書院, 1995. 同著者『19世紀フランス 光と闇の空間—挿絵入り新聞「イリュストラシオン」にたどる—』人文書院, 1996. 同著者『19世紀フランス—愛・恐怖・群衆—』人文書院, 1997.